

## NPO法人未来創立5周年記念講演会 議事録（未定稿）

講演者：平井知事

日 時：平成21年2月14日（土）17：30～18：30

場 所：日本海新聞社中部本社ホール

### 1 はじめに

皆様、こんばんは。本日は、NPO法人未来の5周年の記念ということで、本当に結成以来5年間にわたり、地域の向上に努めて来られました、NPO未来の皆様にご挨拶と敬意を申し上げます。今、岸田理事長さんから過分なお言葉をいただきました。際どい話にはびっくりしましたが、そういえば、確かに、ニューヨークにいた頃、帰って来いと言われた覚えがあったなあと思いましたが、岸田理事長様、遠藤副理事長様、松田副理事長様をはじめ、NPO未来の皆様が本当に力を合わせて、いろんな分野の地域貢献活動を展開されてこられたと、その歩みの5年間だったろうと思いますけど、いろいろと展開が急速に進んできていると拝察しております。

また、本日こうしてお顔を拝見しておりますと、この中部に限らず、首長さんの皆様だとか、いろんなNPO活動だとか、ボランティア活動をされておられる方、東部や西部からもおこしいたげているように拝察いたしております。今日はそういう意味でいろんな顔が集まっているなと感じます。こうした力が私たちのこれからの鳥取県づくりに必要なのではないかと思います。是非、今日をきっかけとして、この後、意見交換会、交流会もあるようでございますので、私たちの地域をつくる取組みが、民（たみ）の力で、地域の力で、みんなの力で、始まることを祈って止まない次第でございます。

### 2 NPOの原点－アメリカにおけるNPOの発達－

昨今、オバマブームとか言われています。アメリカの方で、政治が話題になる訳でございます。オバマさんは演説がお上手ということもあって、英語の教材として売られているらしいですけど、オバマグッズが流行っていると、便乗して福井県の小浜市がフラダンスを踊ったりと、オバマブームが走っている訳でございますけれども、あれはアメリカだなあという風を感じる場合があります。今回のオバマ大統領の演説の中でも、その核心の部分は、非常に印象的でありましたけれども、（英語・略）という言葉があります。これは、「私たちに今求められていることは、責任をそれぞれが持つという、そういう新しい時代なんです。」これがオバマさんが国民に向けたメッセージだったんです。

日本の政治家ではなかなかこういうことが言えないと思うんですね。今、国政を見ていますと、ばらばらになっておりまして、与党も野党もということかもしれませんが、方向性がしっかりと見えないという感じがしております。その中で、それぞれが未曾有の危機の中で、何を取り組んでいけばよいのかという国民へのメッセージがはっきりしないような感じがいたします。

アメリカというのは強烈なリーダーシップが現れる国でして、NPOというのも、アメリカのそういう政治的社会的風土の中から生まれてきた集団なんだと言われております。

多分ですけど、オバマ大統領が下敷きにしたのは、ケネディ大統領のニューフロンティア演説ではないかと個人的には思っています。（英語・略）「あなたがあなたのために国家が何をやるかということをお問うのではなくて、あなたが国家のために何が出来るかということをお問いなさい。」恐らく、日本の政治家がこんなことを言うとても傲慢に聞こえる

思うんですが、アメリカではこれが通っちゃうんですね。そうかと皆、拍手喝采で、スタンディングオベーションになって、ケネディの若々しい感性と一緒に時代が立ち上がるのです。その中でケネディの時代にはいろいろなことが起こりました。例えば、キング牧師ですね。公民権運動。「We shadow over come」という歌を歌いながら、皆で行進をして、街を人が埋め尽くす中で、キング牧師が演説を行う訳です。I have a dream. 私には夢がある。今、色で差別されているけれども、これからは人格で、見識で人が評価される時代になるとキング牧師は説いた訳ですね。このキング牧師を支えていた公民権運動は、市民運動を盛り上げていく大きな契機になった。

non-profit organization というように言われます、NPO。今日お集まりの皆さんのテーマでありますけれども、このNPOの活動、non-profit organization というのは、アメリカの社会政治風土の中から生まれてきた訳です。アメリカの特徴がありますのは、あまり役所を当てにしないということです。非常に逆説的でありますけれど、日本とは違うんだと思いますね。

アメリカは建国のときに何をやったかという、イギリスの王制から立ち上がったんです。ヨーロッパの貴族的な社会から脱却をしようとした、だから、アメリカでは、宗教に対する思いは確かに強いんですけど、ちょっと違う、一線を画している。宗教とは別の世界で、市民がいろんな貢献活動をやっているんじゃないかということです。

ヨーロッパに行きますと、協会活動とかチャリティ活動とかありまして、その中で、福祉とか教育とか、ミッション系のスクールがあるじゃないですか、ミッション系のスクールは日本にもありますけれども、そういうように、宗教の中から福祉だとか教育だとか、社会活動が生まれてきているところがありました。

ただ、アメリカ合衆国は憲法の中で、政教分離ということをはっきりと謳っておりまして、それはイギリスの教会に対するアンチテーゼだと思えますが、宗教とは違うんだということに自分たちの拠所を求めようとした。さらに、政府を信用できない、政府は税金を取り立てる道具だと。ですから、アメリカで最初に建国運動が始まったのは、イギリスが税金をアメリカの人に高くしようとした、植民地支配からでありました。こんなようなことでは駄目だ、政府は信用ならんというのが根っこにある訳です。そういうアンチガバメント、反政府的な気風があって、宗教ではないところに自分たちの拠所を求めようという意識があって、NPOという非営利目的の団体というものを発達させていった訳ですね。

だから、アメリカではいろんなNPO活動があります。教育をやっている所もありますし、博物館をやっているのもNPOでありますし、美術館もそうですし、医療法人もNPOがやっている。そんな訳で、全体でみて、7%くらいの雇用をNPOが支配しているといわれています。基本にあるのは市民社会なんだと思うんですね。市民社会である市民はどういうものか、これは、単に生きている、住んでいるということではなくて、社会に対して、一定の関心を持っていて、自ら判断して、自らの責任で行動する、それで社会に対して貢献していくという、これが、シチズンシップの市民ということの考え方なんです。ですから、それに基づいて行動していくことを理想としている訳です。

だから、NPOでこういうことをやっていますということ、例えば、こういうNPOがあって、そこの理事をやって、私はこういう活動をやっていますというのが、社会的なステータスになるんです。そして、貢献すること、ボランティア活動するということにあまり抵抗感がないんです。それは、人であれば社会に貢献しなければならない、ケネディの言葉にあるように、「国家が何をするかを考えるのではなくて、あなたが国のために何をするかということを考えなさい。」これがまかり通っているといいですか、人々に共感を生

む、そういうルーツであります。もしお金持ちであれば、喜んで寄付をすることでNPOを育てていくことに貢献する、それは社会的にも評価されている。或いは、うちはお金がないが、こういう知恵がある、その知恵でもって、NPO活動を推進していこう。或いは、知恵があるとかお金があるとかいう訳ではないけれども、人々のために体で働くことができる。そういう人たちがボランティア活動の人材として貢献する。お金で貢献するか、或いは労働力で貢献するか、知識で貢献するか、そういういろんなチャンネルが自由に認められていて、それをお互いに認め合うという風土がある訳です。ですから、向こうの方では、日本とはそこら辺がちよっと違うのではないかと思うことがあります。こういうところにNPOの原点があるということを私たちはもう一度認識しなおす必要があると思います。

### 3 日本・世界各国におけるNPOの発達

今、鳥取県も非常に厳しい経済状況の中に置かれ始めました。世界中が、金融危機から始まりまして、打ちのめされるように、景気が悪くなっているということです。ですから、私たちも、今、県庁で予算編成作業をやっています、忙しい時期でして、来週になりますと、19日から議会が始まるということで、予算案の最終調整をやっているんです。去年、平成20年度予算を編成してみたら、何の都合が分かりませんが、3379億円の総額になりました。さんざん泣くという・・・。今年も取りまとめをしております、1円1円積み上げて行きましたら、現在、3387億円、さんざんやなあということになりまして、お金はないですし、やらなきゃいけないことは一杯あります。ですから、県庁というか、県行政がすべきことはやろう、その背景としては、12月26日に、将来ビジョンを皆さんの意見を元に取りまとめましたが、これを実行に移すようにしよう、そのための予算を組もうじゃないか。今経済が悪いですから、それに対する手当てを打とうじゃないか。今まで実はずっと縮小気味だったんですが、雇用対策とか経済対策を入れましたが、去年よりも増えることになりそうです。ですから、大体0.2%くらいの増でありますけれど、予算編成の結果として、平成13年以来の8年ぶりの増ということになります。さらに、公共投資など、国の方から配られる財源も見えたので、これも活用しながら、あまり県民に負担にならないような方法で集約していきまして、これも1月・2月の補正予算を加えますと15か月予算で、大体3%以上増えるということになりました。これは平成12年以来の9年ぶりの増加ということになります。

そういう風に、積極型の財政をやるべき時期になったと思っておりますが、お金はあまりありません。すなわち、税収は85億円くらい減ることになっております。我々はまだ良いですね。今、慌ててるのは、愛知県豊田市、年間予算で360億円以上減ると言われております。どこの自治体も国も含めてそんなに底力がある訳ではない訳です。

ただ、コミュニティが崩壊していても良いのだろうか、身の回りを見渡してみますと、よく言われるのは中山間地域の問題です。限界集落という言葉があって、何が限界なのかということでもありますけれど、それは段々年齢が上がってきておまして、お年寄りが中心の集落になってきますと、60才、70才、80才の方々が中心でありますと、1軒2軒と段々となくなっていくかもしれない。そうやっていきますと、集落がいずれ命運が尽きてしまうかもしれない。そういう深刻な限界集落というものが、鳥取県の中でも現実的に生まれてきています。こういうことだとか、町中を見渡して見てもですね、一つ元気がない。郊外のショッピングセンターは非常に元気だけれど、じゃあ身の回りの商店街はどうなのか、もちろん商店も活性化しないといけませんけれども、それだけでない何か活力が失われているのではないか。今のところ、壁にぶち当たって来ているのが、最近の地方の

現場ということではないかと思うんです。

これを何か私たちの方で力を出せないだろうか、そういう風に考えたときに、これからは、民と官との関係が変わらなければならないんだと思うんです。行政の担っていきける役割、大きさ、キャパシティというのは、私は限界があるだろうと思います。例えば、県庁とか市役所とかでどんどん行政サービスをやろうじゃないか、お金を増やして人も増やしていけるかという、そういうことになりません。ですから、そうなるのですね、やはり官でやるところには限界があるのではないか。じゃあ、民の方でどうやったらやっていけるのだろうか、それがシステムとして作られ始めていて、動き出しているのが今日なのではないかと思います。

NPOの活動が日本で盛んになってきた時期は、平成7年1月17日に起きた阪神大震災がきっかけではないかとよく言われています。これはボランティア革命だという人もいます。すなわち、阪神大震災が起こって、全国に悲惨な状況が報道されました。自分も何かできるんじゃないかと思った人がたくさんいました。学生、既に引退された方たち、自分たちもボランティアができるんじゃないか。鳥取県内からも水を送ったり、応援に行ったり、そういうことが現実になりました。あの辺から、民（たみ）の力といいますか、民力というものが、物事を左右していくということが分かってきた訳ですね。それが進展していきます。そして、平成10年に入りますと、NPO法が国でも制定されまして、県もそれに続いて、NPOの条例をつくったりした訳です。

この時期というのは、日本だけの事情ではなかったのです。世界中で同じような市民革命といいますか、市民が力をつける、そういう時代になってきたと思っています。レスター・サラモンに言わせると、1980年から2000年までの20年間というのが世界中で同時多発的に起きた連帯革命、グローバルな連帯革命の時代だったと言います。なぜ、連帯革命が起きたかと言いますと、先進国では社会福祉国家になった訳ですけど追いつかなくなったんですね、それで、財政が追いつかなくなって、民の方が福祉だとか、そうしたサービスを担うようになってきた、それが背景にある。また、途上国の方でもそれまでは、政府が政府に対して援助するというスタイルだったものが、今度はそうではなくて、政府が Non-Governmental Organization、非政府組織に援助するという型式が増えてきた。これで、民の力が途上国でも高まった。さらに、ベルリンの壁が壊れたりしました。東側諸国と呼ばれる国々がなくなってしまいました。東側諸国と言われた国々では、社会主義国家になりますので、全体が国家強制組織といいますか、統制組織だったんですが、これが変わってしまった。それで、やはり民と官との関係が壊れていった。その中で、当時の国家組織にない民という組織が育っていった。

こういうことで、世界中で同じ様にして、NPOだとかボランティア活動だとか、或いはこういうのにとらわれずに様々な地域団体などが力を上げていった時代が20世紀の終わり頃に訪れたと言われています。それからさらに今10年くらいが経ちました。この動きは加速していると思います。止まっていないと思います。かつてケネディが演説したのと同じような熱気がアメリカ全土を吹き荒れています。

#### 4 鳥取県におけるNPOの現状—県中部の事例を中心に—

日本の中もそうだろうな、鳥取県の中はどうだろうか、これも見てみますと私は確かに今力が着いて来ている、変わって来ていると思えるんです。

鳥取県内でも今NPOの組織率が高まっています。先ほどのお話の中にもございましたけれども、鳥取県はボランティアの参加率が高いということがありました。34.5%も

参加している、全国一だと。NPOの数は全国的に見るとそれほど多い程ではないかもしれませんが、今、168のNPO法人が鳥取県内に設立されています。これは平成11年から始まったことでありますから、急速に増えているということです。特に、今年平成20年度ですけれども、今いろいろと作業しておりますが、年度末まで参りますと、175のNPO法人になるのではないかと勘定されています。それで平成20年度1年間で36のNPO法人が誕生すると、こういう数字になっているんですが、36個が1年間に生まれた年は今までにありませんでした。

ですから、こういうNPO法人を作ろうというニーズが地域で高まっていることを示していることだと思います。そして、その活動の質ですけれども、中身ですけれども、非常に面白い、NPOに限らず地域の活動に面白いものが出始めているんじゃないかと思えます。

例えば、今日主催されていますNPO法人未来であり、さっきも話がありましたが、最初は倉吉未来ウオークということから始めた。なぜ倉吉未来ウオークというかということ、倉吉未来中心をつくった、その倉吉未来中心からスタートしてやっていく、せっかくああいうものができるんでPRしようということがあったんだと思うんですが、そういう話があったと当時聞いておまして、それから今は、倉吉ではなくて、日本海未来ウオークと、歩く範囲も遠く琴浦の方とか、関金の奥の方とか、奥という失礼でございました。まあ、いろいろと中部一円を回るくらい非常に広い範囲になっています。10キロとか40キロウオークとか、朝早くからよくやるなと思うんですが、好きな人がやっておられますし、そういう時代なんですね。

最初はこういうことから始めて、私も2回目かそこらに初めて参加させていただいたりして、ある意味感動するところがあるんですね。それは何かというと、手づくりでやっていることがものすごくよく分かるんです。手づくりでやっているものですから、イベントにいろいろボランティアの方々が出ておられますけれども、給水所といいますか、ちょっと飲み物を置いてくださっている所に行けば、高校生がサービスをしてくれる、歩いていますと応援の声がかかる、そういう意味で地域をあげて、子供も大人もなく、皆でウオーキングを応援しているんですよというメッセージが伝わってくる訳です。これは官製イベントでは絶対できないことだと思いますし、これがあるから参加者というお客さんが増えてきているんだろうと思います。

現に、今、この日本海未来ウオーク、日本海新聞さんが応援されて日本海未来ウオークになったのかよく分かりませんが、この日本海未来ウオークには韓国からも来るんですね、韓国にニイさんというウオーキングの会長さんが毎年のように来られていて、仲間を募ってやって来られる。だから、こちらの未来の皆さんもあちらに行かれて、原州の方でウオーキングイベントに参加される、こういう交流もできていって、要は国際イベントとして通用し始めたのかもしれない。

是非、日本全体のウオーキング大会の中で、公認コースとして認定を受けようじゃないか、次のステップを目指していかれている訳であります。私どもいろいろとお小言をいただくこともある訳でして、財政運営だとかファイナンスがうまくいっている訳ではない、いつも苦勞されながらやっておられる訳ですけれども、ただそうして、人々の力でこうした大きなイベントが動いている地域はよそでウオーキング関係ではないと思いますので、誇るべきことだと思います。

あるいは赤ちゃんに学校に来てもらって、そして心のふれあいをやろうという活動だとか、また「遙かな町倉吉」として売り出して行こうじゃないかということで試みをされています。いろいろと未来の方は動かれている訳です。

こういうのは鳥取県の中部は結構元気な皆さんが多いなと思います。数で言うと20数個なんですけれども、全県の人口比率くらいのNPOの数なんですけれども、一つ一つは、結構成熟された活動をされているものが多いなと思います。

例えば、サカズキネットさんとか、ここも老舗の地域貢献型NPOでありますけれども、最近ですと、森林環境保全税普及のためのシンポジウム、これは県も共催するような形でやったのですけれども、今度は日中緑化基金の助成金を獲得して、中国の方に植林に行こうと、かつて遠山正瑛先生が、「やればできる、やらなければならない」と言った話であります。今度河北省の方にチームを引き連れて行こうじゃないかという動きになってきている。

或いは、倉吉の市内で、コミュニティバスをされているたかしろ、これは県内でのほしりでありますけれども、集落の地元のご自宅までお送りしようと、こういうことを始められて、軌道に乗ってきていると、身の丈にあっているんですね、いろいろな試し方をして、最初は送りだけだったですけど、やっぱり行きも乗せてもらいたいと、要は始めてみれば数は決まりますので、あの人この人あの人という訳で、その人のためのサービスを提供して料金をつくれれば良い訳ですから、こうして少しずつ進化させながらそういう活動をされたりですね。

それから、先般、県庁の方に、三朝の町長さんたちとやって来られましたのは、NPO法人みさき温泉でございます。このNPO法人の皆さんの方々が協力して、「雨の中の初恋」という映画をつくろうじゃないか、これを全国で上映するようにやろうじゃないかということで応募しまして、見事にゲットした訳であります。シナリオを読みましたけれど、シナリオは非常にうらぶれた温泉という設定になっておりまして、三朝で大丈夫かいなあと思うところもありますけれども、そのうらぶれた温泉が立ち上がるという、それは今流行りの派遣労働者とか、職に困っている若者たちとか、立ち上がって応募してきて、女将さんを助けて、料理だとか、旅館のメンテナンスだとか、皆で変えて行って、もう一回再興しようと、最後はハッピーエンドになる訳です。「雨の中の初恋」という映画でございます。今度、ロケに入るらしいですね。どこの旅館か楽しみなのですけれども。

この「雨の中の初恋」の他に、もう一つ雨が降ってしまして、西部の方では「銀色の雨」という雨が降ってしまして、これは中村獅童さんが主役で来られまして、賀来賢人さん、賀来千賀子さんの息子さんですかね、非常に精悍な細っそりとした良い青年でありましたけれども、年を聞いてびっくりしましたけれど18才、そういうキャストが集まってロケをしました。これも米子とか旧淀江、美保関とかロケ地が広がる訳ですが、米子の下町辺りを中心としてロケが行われました。大変なものでございまして、民間の皆さんがいろんな所で協力されてできました。県庁も職員がボランティアとして手伝った訳であります。賄い隊と言って、いただきだとか郷土料理を中心としてスタッフにサービスしたり、ロケですからいろいろと協力しなきゃいけないんですね、例えばエキストラを集めないといけないとか、こういうグッズが必要だとか、そういうことを集めるスタッフも必要なんです。これも市民が皆、手作りでされる訳です。ああいう有名人が来られて、いろいろと町が変わるものだなあと、ちょっと活気づいたような気がしました。中村獅童さんと一緒に記者会見するとき、私は出演者として出席したのではなくて、地元の一員として記者会見にご一緒させていただいたんですけれども、記者会見の前に二人きりにさせられたんですが、とてもシャイなかなんですね、私と一緒に口数が多くなくて、ずっと黙っておられるものから、これは困ったなあと思ひまして、「中村さん、非常に良いときに来られました。今、山陰はカニが旬ですから、思う存分カニを食べてください」と申し上げました。

ら、きょんとした顔をされて、へえとか言って気のない返事をされるんですね。その後、ある放送局の幹部のかたが入って来られまして、空気を察されまして、また何かしゃべらないといけないと思って話しかけられたんです。「中村さん、今度、カニ食べに行きましょう。」今度もやっぱりへえという顔をされまして。何だろうかなと思ったんですけど、その後、記者会見場では、格好良い人ですからね、言い方はすごく素敵なんですけど、「やっぱり米子に来て、空港からこっちに来る車に乗っていると主人公の気持ちが分かったような気がします。でも、地元の人とお話してみると、皆さん、カニが美味しいと言われますが、僕はカニが大嫌いなんです。」と。これは困ったなと思いましたが、中村さんは「帰るまでにカニ嫌いを克服して帰る」と記者会見場で宣言されました。なかなか良い人だなあと思いました。その後、記者会見の後、懇親会といいますか、そういう会場に入りまして、境港の皆さんが張り切って、カニを200枚持って来てくれまして、こんなことを中村獅童さんに言ったら、大変にのけ反ると思いましたが、そういうエピソードもありましたが、「銀色の雨」という映画のロケをやって、民間の力で動いてきたと思います。

こうした様々な住民の活動とか、NPO活動が成長して来ていると思うんですね。例えばある方が立ち上がって、西部から中部にかけて札所を回ります、札所を回るだけでなく、子ども達にメッセージを送ろう、こういうことをやって歩きながら、最後のゴールの地点では山のような人が集まるとか。こういうことが現実的に次から次へと鳥取県内で起こるようになってきているんです。このことを私たちは利用しない手はないし、このエネルギーを地域づくりに結び付けなければならないんだと思うんです。

## 5 鳥取県の取組みー「鳥取力」創造運動ー

県は将来ビジョンをつくりました。ただ、今は画に描いた餅なんだと思うんです。今回、予算編成をしました。ただ、これは額を積み上げただけのものです。この中に、皆さんからいただいたご意見とエッセンスを入れようと今考えております。それは、皆さんから将来ビジョンのご意見をいただいたときに言われていることは、これからは、人を育てて、人財を育てて、そして、地域の中での顔が見えるネットワークづくりをしっかりとやって、皆の力で、官だ民だということではなく、鳥取県の夢を実現させていこうじゃないか、こういう話が聞かれた訳です。ですから、これを将来ビジョンに書きました。

今度、予算編成をさせていただく中でも、「鳥取力」を創造しようじゃないか、鳥取の力というものを皆で作っていこうじゃないか、このためにいろいろと元気に活動しているグループや地域が県内にたくさん出てきました。例えば、鳥取市に行くと、鹿野のいんしゅう鹿野まちづくり協議会というNPOがあります。これが中心となって、そこに都会から帰って来た鳥の劇場という劇団がいて、それに学者の先生が加わって、それからまた、女性の方々が自ら農村レストランをやったり、こうしてどんどん輪が広がってくる。こういう地域が現実にも生まれて来ている訳です。こうした元気な地域づくり、ネットワークをもう一度、鳥取県から再構築してはどうだろうか。今日お集まりの皆さんのような、活きの良い、行動していく力のある皆さんがたのネットワークをつくり、そして、皆さんの方でも、これが必要だということ、例えば人財育成だとか、或いはちょっとしたきっかけづくりというものの行政のサポートだとか、こういうものが必要だというご意見をどんどんいただいで、お互いのコミュニケーションの中で、鳥取県を作り変えていく、これをやるべきだと思うんです。鳥取県は他県に先駆けて情報公開を実現しました。そして、行政と民間との距離は、他よりずっと近いというように言われます。ですから、それを今度は地域づ

くりの中に反映していかなければならないのではないかと思います。

倉吉も白壁土蔵群があったり、これは最初は赤瓦が株式会社化して始めていました、正直ぎっこんばったんとした時期もあったと思うんです。しかし、皆の信念でやって行った訳でありますけれど、そうして気が付いてみると、多くの観光客が来られるようになりました。もっと先を行っているのは、水木しげるロードなんかはそうでありますけれども、境港市にがいなお金があった訳ではありませんで、むしろアイデアと人々の情熱があったから、あそこまで伸びてきた、それをさらにいろんな意味でですね、経済的にもビジネスとして活用する人たちがいて伸びていった。こういうことだと思うんです。こういう良い循環をいろんな地域でおこすことができたなら、そんないろんなビジネスをすることができたら、鳥取県でも5年10年すれば変わったところになるんじゃないかと思います。これは都会ではできないこと、地元だからこそできることがあるんだと思います。

## 6 まとめ

今日はですね、皆様のこの新しい交流の集まりが生まれたんだと思います。これから意見交換もあります。是非今日がスタートとして、鳥取県のページを皆様の力で切り拓いていただきたいと思います。

「何事も絶望するのより希望するのがいい、可能なものの限界は誰にも計ることはできないのだから」これがゲーテの言葉でありまして、ぎりぎりまで、私たちの可能性を伸ばす、その鍵はNPO、企業、地域の団体、市町村、それぞれの皆様が鍵になっているんだと思います。

皆様のますますのご発展を祈念いたしまして、NPO未来の5周年を改めてお祝いを申し上げます。私からのメッセージに変えさせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。

## 7 質疑

(質問)

NPO未来のおかもとと申します。非常に有益なお話を伺いましたけれども、私、未来に参加させていただくようになりまして2年ほどになるのですが、ちょっと物足りないというか、もう少しこのNPOの活動が盛んになるためには、中小零細企業の30代前後の若い世代が積極的に参加してくれるような環境がもう少しほしいのかなと感じています。そのため、厚生労働省でもワークライフバランスの推進ということを随分声を大にして取り組まれているんですけども、経営者の中ではこのような余裕もないということもあってか、なかなか積極的にはしづらい。県の方、行政の方でも、少しでもこういうことに対するバックアップがしていただけるようになれば、もっともっと盛んになると思うんですが、どうでしょうか。

(知事)

ありがとうございます。確かに、もっと若い力が地域の中で引き出されなければならないと思います。そういう意味でおっしゃられるように、一つはワークライフバランス、これは地域活動に参加するということと併せて、むしろ家庭の中での役割を果たす、この意味が一つある訳ですが、これを促進しなければならないと思っています。県庁の中でもモデル的な取組みをやっていると思っていますし、今のツールの中でも中小企業者でもできるようにしておりますので、これを支援する仕組みを私たちの方でも補助制度など活用して普及させていきたいという風に考えております。



それから、もう一つ大切なのは、例えば島根県隠岐では、最近、元気なまちづくりが評判です。それは町長さんのリーダーシップもあるんだと思いますけれども、いろんなかたが参加してくる。特に、IターンだとかUターンが増えていて、若い人たちがいる。こういう人たちを活用しない手はない、よく言われることで、まちづくりは若者、よそ者、口は悪いが、ばか者、一生懸命になってやる、そういうくらいのかたが地域づくりの世界でニーズがありますけれど、若者、よそ者というような人を活用しなければならないと思うんです。これは正しいと思うんですね。

そういう意味で、鳥取県でも、新年度の中で、民間のNPOさんと協力をするような形で、若い人たちがボランティア活動に入っていきような仕掛けを作ろうじゃないか、例えばこういうボランティア活動やっていますよというふうに、皆集めてボランティアバスを出してやってみようか、それから登録してもらって様々なNPOやボランティア活動のお手伝いをするような、そういう風な若者を巻き込んだ、そんなものをつくろうと。いろいろとそうした登録もある訳ですけど、様々な地域のイベントに対するボランティアを支えていくのは、現在の社会福祉協議会では機能を果たせないことになっていますので、もっと広い意味でのボランティア活動を若者が支える受け皿が必要なのではという意識を持っています。ですから、そうした若者のボランティア活動を支える、誘引するような、そういう事業を新年度にやろうと考えています。

いずれにせよ、NPO未来は子ども達にメッセージも出しておられますし、確かに未来ウオークのように、子供の顔の見える活動もやっておられるので、皆さんのノウハウを私たちにも共有させていただきまして、若い世代の人たちが新鮮なアイデアで、全国の人が共鳴できるようなイベントづくりにつながるようなシステムをつくっていきたいと思います。

#### (質問)

東伯から来ましたたかつかといいます。実は私も知事さんと一緒にとてもシャイな人間ですけど、この際、思い切って質問させていただきます。

さっきの話の中で、NPOの成り立ちがアメリカからの市民社会の風土から生まれたものであると言われて、実際に私も未来ウオークからNPO未来の活動に参加させてもらっているのですが、この前から、地元の自治会といいますか公民館の活動に参加する機会があって、こうした活動に参加するかたを初めて知って、NPOと地区の自治会との協働、一緒になってやるようなヒントというか、仕組みがあれば面白いなと感じた。その辺のところをよろしくお願いします。

#### (知事)

日本には伝統的に地縁による自治活動が盛んだったと思います。鳥取の良いところは、今も随分機能していることですね、大都市部だと薄れてきていると思うんです。我々はそうごとがあるといって、皆で出て行ってですね、どぶさらいか草刈をしたり、そういう活動を日常のようにやります。こういうのが鳥取の良いところです。だからこそ、ボランティア参加率だとか、応用がきくのだと思います。

こうした地域の自治会活動は、これはこれで大切にして評価されなければならないと思います。NPOは違ったシステムですね。もっと広い範囲で同じような志を持った人、共感できる人が集まってやるというのが全国的にも一般的だと思います。ですから、活動領域が時として違う場合もあると思いますし、NPOはNPOなりの良さを活かして、賛同

者を集めて、活動を盛んにすればよいんだと思います。

ただ、最近は何の動きが出てきたと思います。地域のこうしたコミュニティ活動とNPOを上手に組み合わせてやれないだろうかという、今おっしゃったような考え方で、鳥取県ですと、智頭町の新田がNPOを集落としてつくっています。新田はNPOをつくりまして、そこに、例えば、移住者ハウスというんですかね、UIJターンをしてくる人が一時的に泊まれるような家をつくると、大阪の生協さんとの交流が前からありまして、田植えをしたりとか、そういうのは前からやっていました。これでお客さんを泊めてということで、一つのビジネスになるといいますか、そういう柱があったり、また、浄瑠璃の館、これは町が建てたのだと思いますが、一種の公民館がありまして、その公民館を利用して、いろいろと人が呼んできて、これは有料ですが、ちょっとした講座を毎月のようにやるのか、こういうことでNPOとして、町内会を発展させて、その中で収支を合わせながらやるというスタイルが生まれてきています。ある程度成功している事例もあって、実際に移住者が最近出てきたとか、そういうものも生まれてきています。

ですから、これからは私たちの方で、NPOだ町内会だと対立的に見るのではなくて、融合させた方がよい場合は、積極的にNPOの手法というのを組み合わせていくことができるのではないかというふうに私も思います。

この辺は、県としても人材育成だとか、NPOの活動を育成する意味で必要なノウハウ、例えば税法上の必要な知識、そういうふうな研修活動だとかネットワーク活動をやっている、多様なNPOのあり方を目指していきたいと思います。